

## 《寄 稿》

# 日本核医学会・アジア核医学会・世界核医学会 の創立と歴史

日本核医学会名誉会員 上 田 英 雄\*

## I. 日本核医学会の設立

日本核医学会は、放射性同位元素協会の核医学部会が主催した核医学研究会を母体として発足した。

核医学研究会は、第1回昭和36年11月23日、第2回昭和37年11月25日、第3回昭和38年11月22-23日の順で開かれた。第1回核医学研究会の施行要旨は次のとおりであった (Table 1)。

Table 1 第1回核医学研究会

会 場	東京大学医学部本館・総合中央館
日 時	昭和36年11月23日 (木) 8:30-17:00
主 催	日本放射性同位元素協会の核医学部会
運営委員長	上 田 英 雄

核医学の重要性と発展性が医学者・物理学者・化学者らにより認識され、核医学の研究が盛んになり、1964年(昭和39年)に核医学研究会は日本核医学会に発展することとなった。したがって、第4回以降は、日本核医学会となり、Table 2のように会長が選出され、核医学会が運営されることとなった。学会の事務所は日本アイソトープ協会内に置かれている。

日本核医学会の日本医学会分科会に加入の件は、8年間にわたる2回の申請をしても不認可であったが、昭和51年(1976年)に3回目の申請により加入が承認された。これは飯尾正宏理事の努力に負うところが大きい。

核医学雑誌の刊行と発展には感謝しなければならない。「核医学」誌は学会活動の中枢であり、学

会と会員の連絡や研究論文の発表に不可欠である。学会機関誌「核医学」の刊行と育成に寄与された会員の功をたたえたい。「核医学」誌は初期には季刊であったものが、現在は月刊となり、そのほかに学会号や Work in Progress 号を出している。近来、日本語が東南アジア地区で理解されるようになり、原著も総会号も読まれている。その点からも学会誌「核医学」の役割は大きい。歴代の編集委員長であった田中茂・秋貞雅祥・橋本省三・菱田豊彦諸会員に深謝するしたいである。

「核医学」誌は会員数3,500名に対応し毎月

Table 2 歴代会長

第1回	研究会	上田	英雄	(1961. 11. 23. 東京)
第2回	研究会	上田	英雄	(1962. 11. 25. 東京)
第3回	研究会	上田	英雄	(1963. 11. 22-23. 東京)
第4回	総 会	上田	英雄	(1964. 11. 17-18. 東京)
第5回	総 会	脇坂	行一	(1965. 8. 29-30. 京都)
第6回	総 会	宮川	正	(1966. 11. 7. 東京)
第7回	総 会	算	弘毅	(1967. 11. 17-18. 東京)
第8回	総 会	平木	潔	(1968. 11. 4-5. 岡山)
第9回	総 会	藤森	速水	(1969. 11. 13-14. 大阪)
第10回	総 会	平松	博	(1970. 10. 21-22. 金沢)
第11回	総 会	南	武	(1971. 11. 14-16. 東京)
第12回	総 会	増田	正典	(1972. 10. 2-3. 京都)
第13回	総 会	高橋	信次	(1973. 8. 27-29. 名古屋)
第14回	総 会	鎮目	和夫	(1974. 7. 13-14. 東京)
第15回	総 会	鳥塚	莞爾	(1975. 10. 27-28. 京都)
第16回	総 会	尾関	巳一郎	(1976. 11. 4-6. 久留米)
第17回	総 会	岡本	十二郎	(1977. 11. 29-12. 1 東京)
第18回	総 会	久田	欣一	(1978. 10. 12-14. 金沢)
第19回	総 会	飯尾	正宏	(1979. 11. 27-29. 東京)
第20回	総 会	永井	輝夫	(1980. 11. 13-15. 前橋)
第21回	総 会	入江	五朗	(1981. 10. 15-17. 札幌)
第22回	総 会	木下	文雄	(1982. 11. 16-19. 東京)
第23回	総 会	赤木	弘昭	(1983. 9. 23-25. 高槻)
第24回	総 会	刈米	重夫	(1984. 10. 18-20. 福島)
第25回	総 会	河村	文夫	(1985. 10. 9-11. 徳島)

\* 元東京大学医学部内科学教授  
日本心臓財団副会長・榊原記念病院顧問

4,000部を刊行し、国内のみならず韓国・台湾・中国・フィリピンなどの諸国に送付している。

## II. アジア・大洋州核医学会の設立

核医学に関する世界の情勢をみると、北米には、(1) 北米・カナダで構成される Society of Nuclear Medicine, (2) 中南米の核医学会を構成学会とする ALASBIMN, (3) 欧州の 2 つと連合核医学会などがある。世界的国際核医学会を設立するためにも、また距離的に近いアジア核医学会が連合核医学会を設立しないのは不合理的と考えられた。

Pisa 宣言(1967年)直後の1969年に東京において、世界放射線医学会が開催され、核医学を研究している学者がアジア・大洋州地域から集まってきた。この時に、オーストラリア・韓国・台湾・ニュージーランド・マレーシア・タイ・フィリピン・香港・日本の 9 か国の核医学者が会合し、アジア・大洋州の連合核医学の設立を討議し、全部の代表の賛成を得た。役員としては、会長上田英雄、事務総長飯尾正宏が決定された。

1974年の東京大会の時には、インド・パキスタン・イスラエルの 3 国が新加入し、総計 12 か国となっている。

各国の会員数としては、Hong Kong 50, インド 300, イスラエル 60, 韓国 150, マレーシア 12, フィリピン 35, パキスタン 14, 台湾 20, 日本 1,800 の数があげられた。

第 1 回のアジア・大洋州核医学会は、1976 年に Sydney において、Dr. Hales, I. B. 会長により開催された (Photo 1)。

第 2 回のアジア・大洋州核医学会は、1980 年にフィリピンの Prof. Villadolid, L. 会長により Manila 市において開かれた (Photo 2)。第 3 回は 1984 年に Seoul 市にて、Prof. Lee, M. により盛大に実施された。Dr. Wagner, H. N. やノーベル賞学者 Dr. Yalow, R. S. も出席し、大きな規模で行われ、あたかも世界核医学会のごとき観を呈した (Photo 3, Photo 4)。

第 4 回のアジア・大洋州核医学会はきたる 1988 年に台湾の台北市において、Prof. Yeh, P. Shin

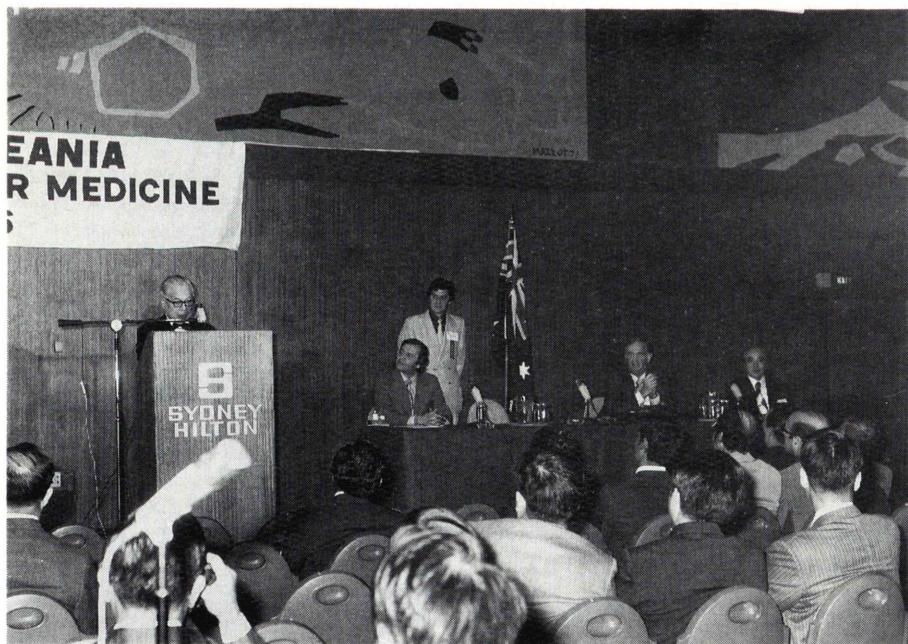


Photo 1 第1回アジア・大洋州核医学会(Sydney).  
正面、右より Dr. Iio, Dr. Hales, Dr. Murray, Dr. Ueda



**Photo 2** 第2回アジア・大洋州核医学会 (Manila).  
右より2人目 Dr. Hales, 3人目 Dr. Murray, 6人目 Dr. Villadolid



**Photo 3** 第3回アジア・大洋州核医学会 (Seoul).  
会長 Prof. Lee, M. (左方)



Photo 4 第3回アジア・大洋州核医学会。  
右より2人目 Nobel 賞の Yallow 女史, 右端 Lee 会長

Hua により開催される予定である。アジア・大洋州核医学会は Charter により4年ごとに開かれることになっている。核医学の発展のために、アジア・大洋州核医学会のますます発展することを祈りまた信じている。

### III. 世界核医学会の創立と第1回総会日本開催

第1回の世界核医学会が1974年に日本で開催される運びとなったのは、誠に不思議な機縁によるものであった。

世界核医学会設立の構想は、1967年に伊の Pisa で開かれたイタリア核医学会のときに樹立されたのである。この医学会に参加した Sternberg, J. らにより世界的な核医学機構が必要であるとの Pisa 宣言が発表された。この宣言の実現を計る委員会が次の7名の核医学者によりつくられた。

Donato, L. (Italy), Scheer, K. (West Germany), Ueda, H. (Japan), Bedoya, J. (Peru), Varela, J. I. (Argentina), Zedgenidze, G. A. (USSR), Lawrence, J. (USA), Sternberg, J. (Canada).

その2年後の1969年に北米核医学会が New Orleans で開かれた時に、世界核医学会設立のための実行委員会が承認され、その委員長に Sternberg, J., 副委員長に Scheer, K. が選ばれた。

1970年に世界22か国の核医学会代表が Mexico City に集まり、Sternberg, J. より世界核医学会設立実行委員長の代理を委託された Maass, R. が議長となり、世界学会の設立と Charter を論じた。この時に、日本の新発田杏子会員 (Hoechst) があらかじめ準備し起草していた Charter 原案を中心にして議事が進められた。種々論議の末に最も合理的、国際的に作成されていた日本案に近いものが、世界学会の Charter として採用された。

この Foundation Charter に従えば、まず世界学会の会長を決定しなければならない。各地域の学会ごとに合議の後に、全代表の出席した総会において、上田英雄が満場一致にて1974年の第1回の世界学会の会長に選出された。その直後に世界学会の組織委員の指名をせまられ、打合せのひまもないまま、事務総長飯尾正宏、財務委員長加藤

貞武、二氏を指名したのである。

1971年6月に北米核医学会が Prof. Taplin 会長で Los Angeles において開催され、世界学会の準備をかねて、世界核医学会科学会議が開かれた時に、世界各国の代表の Charter への賛成署名を

集め、世界核医学会が正式に成立することになった。

その後、3年間の準備期間をおいて、1974年9月30日より10月5日にわたり、第1回核医学会を東京と京都において開催することができた。



Photo 5 第1回世界核医学会の開会式。  
右方に皇太子殿下・同妃殿下台臨、左方は Ueda 会長

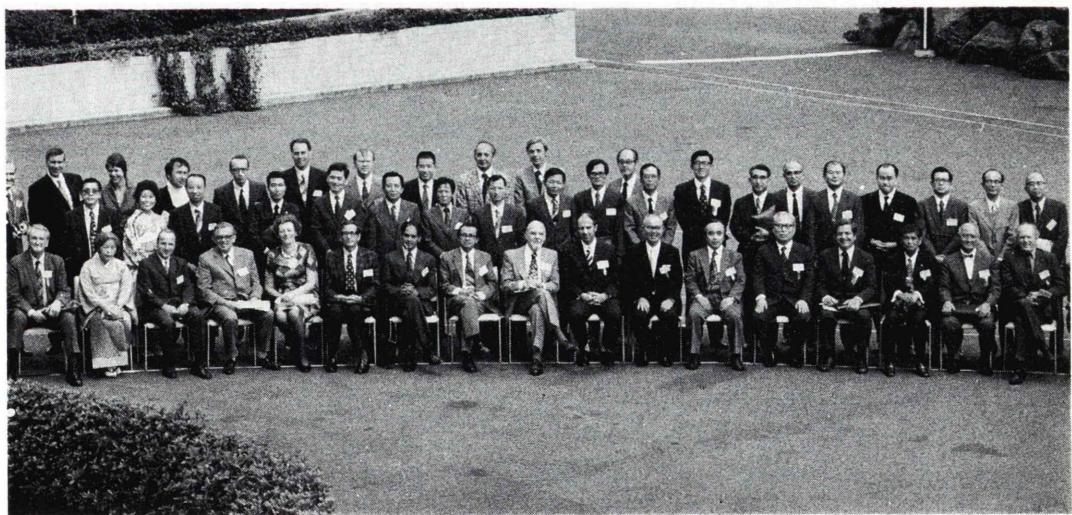


Photo 6 第1回世界核医学会出席の各国代表。  
前列、右方より4人目 Dr. Wagner, 5人目 Dr. Ueda, 6人目 Dr. Iio, 7人目 Dr. Kato, 左端 Dr. Kellersohn

**Table 3** World Federation of Nuclear Medicine and Biology  
Second International Congress  
OPENING CEREMONY Sunday, September 17, 1978

<i>Presentation of Colors</i>	<i>United States Color Guard</i>
<i>Opening Remarks of President</i>	<i>Dr. Henry N. Wagner, Jr.</i>
<i>Presentation of Recognition Awards</i>	
<i>International Atomic Energy Agency Atomic Energy Commission-Energy Research and Development Agency-Department of Energy Veterans Administration</i>	
<i>Award of Gratum Genus Humanum Gold Medals</i>	<i>Dr. James J. Smith</i>
<i>Dr. Solomon A. Berson (posthumously) Dr. Rosalyn S. Yalow</i>	
<i>Presentation of Georg von Hevesy Prize</i>	<i>Dr. Wolfgang Horst</i>



Photo 7 第3回世界核医学の開会式。  
右端 Kellersohn 会長, 右より3人目 Dr. Yalow, 6人目 Dr. Ueda, 左端 Dr. Wagner

開会式には皇太子殿下、同妃殿下の台臨を仰ぎ、皇太子殿下のお言葉、茅誠司アイソトープ協会会長、筧弘毅、Dr. Claure, H., Dr. Maass, R., Dr. Wagner, H. N. 等の祝辞を受け、華々しく会議が始まられた(Photo 5)。ノーベル受賞者 Yalow や米の Wagner, H. N. 仏の Kellersohn, C. らは学会の組織化が立派であり、核医学の向上と普及に貢献したとの言葉をよせてくれた(Photo 6)。

世界核医学の誕生には種々迂余曲折があり、内外の学会の先覚者・同僚に迷惑をかけたことを遺憾に思っている。しかし、幸いに世界核医学がその後も順調に発展し、世界の核医学のために貢献していることを確かめ、心の中で喜んでいる。

第2回の世界核医学は1978年9月に北米の Washington, D. C. で Wagner, H. N. 会長のもとで開催された(Table 3)。第3回の世界核医学は

Parisにおいて Kellersohn, C. 会長により行われ、5,000名の会員を集めた (Photo 7).

次の第4回世界核医学会はアルゼンチンの Buenos Airesにおいて今年(1986年)11月に Picorini, V. を会長として開催される予定である。

始めに Foundation Charter がつくられる時に、世界学会が4年ごとに開催されるとして、その順序をどうするかは規定されていなかった。国際学会は3大陸を順次に廻るのが普通であるが、アジア(日本)→アメリカ大陸(北米)→欧州(フランス)→南米と廻ってしまった現在、次の世界学会をどの大陸で開催するかが問題である。もし第5回開催をアジアに求める時に、アジアのどの国を候補とすべきか今のうちに考えておくべきであろう。

## むすび

内外の核医学会の設立の事情について、著者の関係した範囲で客観的に記述した。核医学は年々進歩し、内容を変化しているが、核医学誕生後30年を顧み、さらに近い将来の核医学会の在り方について考えてみた。

## 引用主要文献

- 1) 上田英雄：世界核医学会とアジア・大洋州核医学会の設立事情。核医学 **22**: 1097, 1985
- 2) Matson EJ: History of Nuclear Medicine. Proc of 1st World Cong of Nuclear Med, pp. 1500-1501, 1974
- 3) Ueda H: "History of Jpn Nuclear Medicine. pp. 3-7, in "Nuclear Medicine in Japan" edited by Iio M, Int Med Found of Japan, Tokyo, 1975